モンゴル帝國成立以前における遊牧民諸部族について

——ラシィード・ウッ・ディーンの「部族篇」をめぐって——

村上正二

はしがき

九世紀中葉における東ウィグル帝國崩壞以後、十三世紀初頭のチンギス汗帝國出現にいたる數世紀は、トルコ系諸民族のモンゴル高原支配からモンゴル系諸民族の支配へと移行する時期に當っており、チンギス汗帝國の成立とそれに伴う新しいモンゴル民族の誕生は、この高原地帶における、まさにそのような歴史的過程の完成を意味するものであった。從って、モンゴル帝國あるいはまたモンゴル民族の成立過程を說くに當っては、それ以前におけるこの方面のトルコ・モンゴル系乃至その他の諸種の部族集團の政治的動向並びに社會構造などをあらかじめ明らかにしておかねばならないであろう。それにも拘らず、關係史料が極めて乏しいので、この期間におけるユーラシヤ草原地帶の遊牧民集團の動向は、その全貌はおろか、大要さえ把握するに、かなりの困難を覺えさせる。だが、モンゴル帝國直前の狀態ならば、この帝國の歴史を取扱った東西文獻のなかに、多少ともふれられているので、どうやら一般的傾向だけは窺い知ることができそうである。ことに、世界史の敍述を意圖して、當時のユーラシア大陸全域の遊牧民集團を綜合的に取扱ったラシィード・ウッ・ディーンの『ジャミ・ウッ・タワーリフ』の「部族誌」の篇は、この點でははなはだ便利な史料であろうかと思う。もとより、當時の斷片的な文獻資料やあるいは曖昧な傳聞資料をいたずらに寄

せ集めて作ったという觀がしないではないが、これらを彼一流の見解によって分類し、それにいちおう秩序立った説明を加えているので、われわれも、このラシィードの「部族篇」に批判を加えつつ、それを通じて當時の遊牧部族集團の動向一般をさぐってみよう。

一　ユーラシア大陸のトルコ・モンゴル系遊牧民集團とその分類について

ラシィード・ウッ・ディーンは、當時のユーラシア大陸の草原地帶に擴散して、南方の定着農耕民集團と拮抗した、すべての遊牧系諸種族について、まず、つぎのように説き始める。

第一に知らねばならぬことは、世界の各地域には〔お互いに生活様式を異にする〕住民、〔すなわち〕定住の民と遊牧の民とがいたということである。とくに森があり、草も豐かで、城廓や村落から遠く離れている地域では、〔住民の〕多くは、遊牧民となった(略中)。太古の時代から今日にいたるまで、トルコ人と呼び慣わされてきた、かような〔遊牧の〕人びとは、草原の曠野〔例えば〕ロシア人、チュルケス人、バシュキル人などの〔住む〕デシト・キプチャク(キプチャク曠原)およびタラス、サイラム、イビル・シビル、ブラル、アンカラ河諸流域の山岳、森林など、トルケスタン、ウィグリスタンという名で知られている諸地方。ナイマン人の〔住む〕諸河、諸山脈、例えば、青いイルティシュ支流、イルティシュ本流、カラコルム、アルタイ山、オルホン河。キルギス人やケムケム人の〔住む〕諸地方。〔または〕モグリスタンという名で知られている〔かつては〕ケレイト人に屬していた無數の夏營、冬營の地のある諸地方(略中)などに〔廣く擴がって〕住んでいたのである。〔これらの人びとは〕、現在では〔古い習慣によっておのずと〕定められた法に從って、〔これらの諸地域に〕住みついたものである(略中)。時の流れとともに、これらの住民は無數の親族集團(arab. qabila)に分かれ、いつの時代にも、その各々の分枝から新しい分枝が生じ、その各々がそれぞれの理由や動機によって〔各自〕固有の名をとるようになった(略中)。その外貌や言語はお互いに近似してはいるが、〔彼らの住む〕地域の性質やその自然的條件によって〔これらさまざまの〕トルコ人諸部族の間に、〔おのずから〕かなり基本的差違が生じた。ごく最近までたれも〔トルコ族の〕數多くの分枝(arab. shu'ab)のリストを文書の形で書き纒めた人はいないし、長い年月が經っているにも拘らず、この點、これら〔分族の〕名稱の起源さえ分かっていないのだが、權威ある語人や若干の信用おける文獻に從って述べて行こう(ХЕТАГУРОВ : ТОМ I. КНИГА ДЕРАЯ p. 73—75)

かように、ラシィードは當時のすべてのユーラシア大陸の遊牧諸族をトルコ民族の系統とみなして、諸部族集團はみなその分枝なのだと考える。そして、これらの多種多様

な部族集團（arab. aqwām, qaum の複數形）は、右にあげられたようなトルケスタン、ウィグリスタン、モグリスタンの各草原地域にそれぞれ分かれて遊牧社會を營んでいたが、それらはいわば慣習的に各自の領域と認め合った地區内に住みついてきたものであり、しかも、それらの部族からは絶えず多くの親族集團（arab. qabila）が分岐して出たが、それらは種々の理由や動機から、またそれぞれ固有の名をもって獨立するにいたったように說くのである。そして、これら諸部族の政治的狀況一般については、またつぎの如くいっている。

すべてのトルコ諸部族（arab. Aqwām）やモンゴル諸部（arab. Ansāf, Sinf の複數形）については、以上述べた通りだが、これらすべてを支配しうるような唯一の、强力な君主をもったことは一度もなく、各種族にはそれぞれ別箇の首長やエミールたちがいたことを知っておかねばならぬ。年がら年中、彼らはちょうどわがイランの地に住むアラビヤ人同樣に、互いに敵對して、戰爭し、掠奪し合ってばかりいたが、〔それは〕種族ごとに定まった首長があって、ほかの誰にも屬そうとはしなかったからなのである（ibid；TOM I. КНИГА ВТОРАЯ p.75）

つまり、これらの諸種族は、各々自己の領域を支配する定まった首長をもつところの、一個の政治的集團（Political Entity）をなすものであって、その資格においてつねに相對峙し抗爭し合っていて、これらすべてを統合する政治權力構造すなわち大帝國はいまだ生じていなかったというのである。

ついで、彼はこれらの遊牧民諸集團の歷史的由來を敬虔なイスラム神學者たるにふさわしく、ユダヤの五書とイスラム史書の傳承のなかに求めて、これらの諸部族はすべて豫言者ノアによって東方に派遣された第三子、ヤペテの子孫であると說明する。すなわちこのヤペテをトルコ人が民族的始祖と仰ぐ Abulja xan または Bulja xan に當るものと考え、この人物が全遊牧民族の主として、モンゴル高原のカラコルム地方からセミレーチェ地方のタラス、サイラムの平原にいたる廣大な地域に移動遊牧していたことを傳える。しかも、ラシィードはこの人物の孫乃至曾孫にトルコ民族のまた別の著名な民族的始祖オグズ汗を配し、このオグズ汗のときにいたってはじめて唯一神敎たるイスラムを信奉するにいたった。その結果、それまで異敎の神々の下に統一を保っていたトルコ民族の間に大きい對立と分裂とが生じて、多くの集團にわかれユーラシア大陸の各

地に移動分散するにいたった。その際、このオグズ族の母體から分離して東方へ立ち去ったものが、やがてモンゴル高原の諸部族になったというふうに、彼は説くのである。

以上のような、彼の雄大な世界史的展望のなかには、イスラム神學者にしての彼獨自の史觀が祕められていることであろうが、その信仰告白ともみらるべきヤペテ傳承を別とすれば、このアブルジャ汗やオグズ汗傳承のなかには、トルコ民族發祥に關する彼ら自身の古い傳承が含まれているようである。つまり、トルコ民族は古くから右のようなユーラシア大陸の中央部に横わる草原地帶を原住地としており、そこから多くの部族が種々の理由や動機からつぎつぎに分岐獨立して、各地に流出して行ったというのである。その最初の始祖アブルジャ汗の詳細については、遺憾ながら不明だが、つぎの始祖とされているオグズ汗は牡牛（その名の Oküz は、トルコ語で牡牛の意といわれる）あるいは牡牛、狼、黒貂、熊という四獸の姿をもったという、トルコ民族のいわば族靈（トーテム）的存在であった。ここではそれについて論じている暇はないが、このオグズ汗のイスラム改宗によるトルコ民族分裂の説話は、恐らくはその一部は、隋唐のころ、ユーラシア大陸を雄飛したかの九姓鐵勒（To-quz-Oghuz）というトルコ諸部族の連合體の分裂の追憶を物語るものであり、他は、セミレーチェ地方に殘留した一分派のオグズ族が、十世紀ごろから南西のアム河方面に南下移動して、サーマーン朝のイスラム文化の影響でそれに改宗されていった事實を傳えるものでもあろうか（Barthold : Four Studies on the History of Central Asia p. 20）。

つぎに、ラシィードはこのような全トルコ・モンゴル種族の個々の説明に入るに先立って、これらすべてをつぎの四つの大きいグループに分類する。このうち、基本的グループとでもいうべきものとして、まず、第(1)のグループに、オグズ汗傳承をもつ當時のオグズ族集團とその類族とみなされたウィグル、キプチャク、カルルク、カンクリ、アガチュリなどのトルケスタン、ウィグリスタンに住む諸種族一切を含める。そして、その東方のモンゴル高原方面に住む諸種族については、彼は、これらとは全く別箇に、第(2)、第(3)、第(4)という細かいグループに分かって説明しようとした。

右のうち、トルコ民族の基本的グループとして、西アジ

アにおけるオグズ族およびその類族を取扱うことは容易に了解できるよう。だが、モンゴル方面の諸部族を三つの細かな區分をする、彼の理論的根據は、きわめて不得要領である。第(2)グループについて、ラシィードは〝現在でこそモンゴル人と呼ばれているが、この名稱はあとからつけられたもので、もとはそうでなく、個々の名稱をもっていた種族であった〟という説明を加えており、第(3)のグループについてもまた〝この諸種族も前者と同じく草原に住むもので モンゴルという名稱をもってから、さほど間のないものである〟といった曖昧な表現で説明している。そして、第(4)のグループについては〝その出自はエルグネ・クン(アルグル河の谷)に立ち去った二人の人間ヌクズとキャンに由來するもので(略中)、モンゴルという名は、彼らの血統のすべてのものの名となり、今日では、さらに彼らに類似する他の諸種族にまで擴がるにいたった〟と述べて、モンゴル帝國の支配的種族となった、いわゆる固有のモンゴル族(Moruli Khâss)をここに包括するのである。どうも、これらの文言の調子から考えると、第(2)と第(3)のグループの區別は、第(4)のグループに征服されて、モンゴルなる名稱をとるにいたった時間の前後で區別した、便宜的なものと受取ることもできそうである。だが、果してそのような單純な理由だけで、ラシィードはこれらの區別をあえてしたのだろうか、いささか疑問である。そこで第(2)グループとしてあげられている諸種族の内容をみると、例えばタタール、ジャライル、メルキト、オイラトなどは、地理的に、モンゴル高原の東北部からバイカル湖周縁の森林地帶にかけて住していたもので、從って、彼らは、歴史的に深い相互關係を保ってきたようである。これに對して、第(3)グループに含められたケレイト、ナイマン、オングト、タングトまたはキルギズなどの諸部族は、モンゴル高原の中央部からその西北部乃至南部にかけて住していたものであった。それを第(2)グループの東北系諸種族に比するとき、そこには種族的にも文化的にも尠からざる差異を見出さざるを得ない。つまり、當時のモンゴル高原の地帶は、大まかにいえば、東北部と西南部とに二分されるのであり、多少の出入りはあろうが、大體バイカル湖東岸から當時のモンゴル族の聖地とされたブルハン山(オノン、ケルレン、トラ河の上源とされる)とを結ぶ線の以東が、モンゴル語系の諸部族の住む地域であ

り、イェニセイ河上流源からハンガイ山脈にいたる線の以西がトルコ語系の諸部族の住地であって、その中間地帶をなすバイカル湖西岸からセレンゲ、オルホン河畔にかけての地域は、モンゴル、トルコ兩語族の混淆地域であったように推定される。從って、このような種族、言語的見地からみれば、ラシィードのいう第(2)グループは、第(4)グループの〝固有のモンゴル族〟をも含めて、モンゴル語を使用する諸部族をいうものであり、これに對する第(3)グループは、それ以外の純トルコ語族、トルコ・モンゴル混淆語族、さらにタングト語族、その他一切の部族を含めたものと解することができるであろう。また文化史的見地からみれば、東北系のモンゴル語部族は、彼らの原住地でもあったらしきバイカル湖東方一帶の森林地域に榮えるシャーマニズム（ラシィードはこの著書において、バイカル湖東岸のバルグジン・トグムの地は、シャーマン發祥の地で、とくにシャーマンの信仰がつよく、その數も多いと傳えている）的傳統のなかに生きていたもので、狩獵文化の殘滓を多分に殘していたが、その以西に住む第(3)グループの諸部族は、唐末以來この方面に榮えたウィグル・トルコ文化の忠實な繼承者として、ネストル派キリスト教（もっともこれが一般に彼らの間に普及したのは一〇〇二年以降であるといわれている）を始め、マニ教、佛教、儒教など高度の文化の影響をうけて、かなり開化した遊牧民であった。當時の中國の史官たちが、これらモンゴル高原方面の遊牧諸集團を總括して韃靼といったとき、彼らがとくに熟、生（これをさらに、黑と白に分かつ）あるいは黑、白、生などという文化水準による區別を設けて、北方森林地帶の狩獵民を生、第(2)グループの遊牧系のものを黑、第(3)グループのものを主として白乃至は熟と稱した（『建炎以來朝野雜記』乙集卷十九、『蒙韃備錄』「立國」の條參看）というのも、まさにこうした當時の實情に起因するものとみてよいであろう。さらにまた、元朝に入ってから、その治下の全種族を分類した場合、第(2)グループの東北系のものは、殆どが國族（輟耕錄のいわゆる蒙古七十二種系）のなかに組み入れられたに對して、第(3)グループの西南系のモンゴル・トルコ語族のうちで、ラシィードもまたモンゴル種であるとみた、ケレイト族を除く外は、ことごとく色目系（輟耕錄の色目三十一種系）に組み入れられている事實もまたかような實情の反映に外なるまいと思う。イル汗國の宰相として、親しく彼らに接觸していたラシィードは、恐らく、このような地域による諸部族間の大きい差違を肌で感じとっていたはずである。それだからこそ、はなはだ曖

味な説明の仕方によってではあったが、このような第(2)と第(3)とのグループ分けを行って、モンゴル方面の部族群を整理しつつ、個々の部族集團の説明にあたろうとしたものとわたくしは想像したい。

二　オグズ族並びにその類族について

ラシィードは當時のオグズ族集團を全トルコ・モンゴル系遊牧民の本源的部族と考え、この種族の説明からその「部族篇」を始める。當時この部族は背後から類族たるキプチャク族の壓迫をうけ、原住地のセミレーチェ地方から、カスピ海の北岸やシル・ダリヤの流域方面に移住し來って、サーマーン朝のイスラム文化の影響の下にイスラム化しつつあったという。それにも拘らず、この部族に特徴的なことは、トルコ全民族の始祖傳承を保持すると同時に、過去の古い部族制的構造をも維持していたらしいことで、ラシィードは「部族篇」のなかで、二十四分族からなる、そうした古い部族構成を詳らかに説いてくれる。それによると、この種族の〝族靈〟と覺しきオグズ汗なる人物から、日、月、星、空、山、海という、この宇宙的空間を構成する主要な要素の支配者となった六人の兄弟が、まず誕生した。これら兄弟の上三人と下三人とが、各々右翼（右が上位で〝弓〟を象る）と左翼（左が下位で〝矢〟を象る）を構成したが、彼らはまたそれ自體で、各々自己を始祖とする同數の親族集團をつくった。それら六つの集團は、さらに四つづつの分族にわかれて、オグズ種族全體はこのような二十四の分族から構成されるところの部族制社會であったという。なお、ラシィードはこの異なる段階の各集團について、それぞれ所屬の定められた〝オンゴン〟と〝タムガ〟および酒宴の席で共食さるべき肉片の各部分—肩、脇、腰など—を掲げたリストをつくっている。ただ、このリストにはかなりの缺落や誤謬もあるので、いちおうそれらを整理統合してみると、別表のようになるであろう。つまり、オグズ族はまず、右、左の兩翼に分かれるが、それらはいずれも〝たか〟〝わし〟乃至はその變種の鳥類を交互に自己の〝オンゴン〟としてもつ六つの親族集團からなるものであった。そしてこれらの集團の成員は、その〝オンゴン〟かまたは犧牲獸かいずれかの肩、脇、腰など、各自あらかじめ定められていた肉片の部分を共食し合ったというのであり、ま

た、この集團の四つづつの分族は、各々〝タムガ〟を異にする小集團として互いに他から獨立する血族集團であったというのである。〝オンゴン〟というのはわたくしがかって解釋したように（「モンゴル部族の族祖傳承について」史學雜誌七四―七・八）ユーラシア大陸の未開な狩獵社會にみられる〝族靈信仰〟であり、それは早春氷の解けて草が萌え始めるころ、〝母なる動物〟の姿をとって、この地上の聖域たる〝ウチュケン山〟（Ütükän Yiš）に顯現するものであった。また〝タムガ〟というのは、狩獵遊牧民間での所有權の標識を意味する。從って、この六つの親族集團は、恐らく〝オンゴン〟を同じくする集團同志で相集ってその祭を催したのであり、その際、それら集團の成員たちは集團ごとにあらかじめ定められていた犧牲獸（すなわち〝母なる獸〟）の肉片を共食し合い、その共食の儀禮を通じて〝オンゴン〟と交感したのであり、また、それを同じくする仲間との間に一體感を深めたことでもあろう。そして、〝タムガ〟すなわち、財產―牧地と家畜群―の標識を異にしたという四つづつの分族は、各々自己自身の牧地、家畜群をもつ最小の血緣共同體をなしたものとみることができよう。かような自己自身の牧地と家

オグズ族の部族構成表

翼		始祖の名	オンゴン	共食さるべき肉の部分
右	I	Qun-xan（日の王）	白鷹	最初の肩肉〔右の肩肉〕
	II	Ai-xan（月の王）	わし	最後(？)の肩肉（腰肉？）〔左の肩肉〕
	III	Yulduz-xan（星の王）	Taushanjil（わしの一種）	最初の脇肉〔右の脇肉〕
左	IV	Kök-xan（空の王）	Sonqor（たかの一種）	左脇肉
	V	Taγ-xan（山の王）	不明〔たかの一種？〕	〔最初の〕背肉（？）〔右の腰肉〕
	VI	Dengiz-xan（海の王）	Čaqir（小わしの一種）	腰肉（？）〔左の腰肉〕

註〔　〕内は筆者の解による補正。なお〝最初〟とあるのは多分〝右〟の意であろう。彼らの間には、右はつねに左より優位である。

畜群をもつ最小の血縁的共同社會を、いまかりに氏族（モンゴル族の〝オボ〟にあたる）と呼んでおくなら、この四つの氏族からなる大きな親族集團（これはトルコ・モンゴル語の〝ウルフ〟にあたろう）を〝姓〟と〝氏〟とを使い分ける中國流の表現に從って、前者の〝氏族〟に對して〝姓族〟とでもいっておくことが利便であろうか。ともかくラシィードによって描かれた當時のオグズ族は、かような〝オンゴン〟と別箇の始祖をもつ親族集團としての〝姓族〟と自己の牧地や家畜群を所有する血族集團としての〝氏族〟という、二つの階層的集團からなる部族制的社會であり、しかもそれはその全體が〝族靈〟信仰を基軸として儀禮的に、機能的に動いてきたところの呪術的政治社會でもあった。そして、そこにはかような呪術的機能を打破して、これら〝姓族〟を軍事政權の下に統合しようとする英雄も、いまだ出現していなかったようにみえる。その限りにおいて、オグズ族の社會は原始的遊牧部族制社會の一つの典型を示したものといってもよいであろう。

つぎに、ラシィードによって、このオグズ部族集團の類族とされたキプチャク族以下の諸族について述べねばならないが、彼自身の記述があまり簡單で、その歷史や部族構造を窺うべき材料を傳えていないので、ここでは、先學の研究や多少の關係資料によって、その大要を知るにとどめたい。

キプチャク（Qipcaq 欽察、欽义。西ヨーロッパ人は Qūmāni と呼び、ロシア人はПОЛОВЕЦ すなわち草原の人という意）族は、Hudūd al-'Alām などによると、Kīmāk なる種族から分離した部族で、その首長は Kīmāk 全體を代表していたという。また、バルトールドは、Marquart の說に從って、十世紀ごろ Irtiš 河畔にあったという Kimäk なる部族の名は Iki-Ämäk すなわち二つの Ämäk の意で、それは Ämäk 族と Qipcaq 族とをさしたものであり、そのうち後者が强力で、十一世紀ごろから發展し始め、南方にあった前述のオグズ族を追い拂って、當時〝オグズ曠原〟と呼ばれていた、黑海からウラル山脈にいたる廣大な草原地帶をば文字通りの〝キプチャク人の曠原〟（Deśt-i-Qipcaq）に變えたという。だが當時は、この種族には何らの政治的統一もなければ、國家組織はもとよりなく、各姓族、分族ごとに、その廣大な草原地域に分散遊牧していたらしく、ドーソンの傳えるエジプトの史家 Novairī

の著述によると、當時のキプチャク種族は、十一の部族乃至姓族（その名はつぎのようである。Tokssa, Yetia, Bouri (Ogli, Erberli, Coungour Ogli, Antchogli, Dourout, Felana Ogli, Dieznan, Cara) Beurkli（黒い帽子の意）に分かれていたという。そのうち、地域によってはイスラム化されたもの、異教徒として止まったもの、さまざまであったらしいが、十一世紀中葉には、ホラズム國と交渉をもち Sugnaq を支配した王者も現われたと傳えられる。のちのことではあるが、バトゥ汗の西征の折、モンゴル軍に抵抗したカスピ海北岸のキプチャク族の首長八赤蠻（ラシィードには Olu bluq族出身とみえる）は、この方面の有力な軍事的指導者であったろうと思われる。當時、彼らは纛（Turc, Tur）を部族的軍隊の標識として掲げたらしく、〝九頭の纛〟の王者（Toquz Turlay xan）といわれたものが、このような軍事的指導者であったろうが、チンギス汗以前において、彼らがかかる軍事的指導權を通じてどのような部族國家を組織したかは明らかでない。なお、キプチャク族に關する傳承としてオグズ汗のとき、姙娠中の女性が巨樹の穴に入って生んだ子が、キプチャク族の始祖となったという挿話が傳えられている。これは女性が樹靈の庇護の下に安産したという意味にもとれようが、むしろそれは變形した傳承の形であり、もともとは巫女が樹靈をうけて姙娠し、その子を生んだというのであったかもしれぬ。これは、なおウィグル、ナイマンなどのトルコ系の諸族に共通する樹靈傳承として注意されてよい。

このキプチャク族と殆ど不可分の形で、つねに西方の史料に現われてくるのが、カンクリ（Qangli 康里 康禮）族である。Qangli とは〝二輪の車〟の意だというが、同じような意味をもつ昔の弓月族や高車族とは恐らく直接の關係はなく、むしろキプチャク族の分派か、あるいは Ämäk 族などから分岐したものかもしれぬ。ともかく、當時は姓族、分族ごとに分裂していたらしく、ホラズム國に入ってその軍事力の中核をなしていたと傳えられる。また、同じ類族に、カラチ（Qalač）族という集團があったが、バルトールドはカシュガリーを引用して、これはもともとオグズ二十四分族から分離したという二分族の名であるらしく、その一部は早くからイラン、アフガンに入ってその地に定着したという。同じくアガチェリ（Aghačeri）族というのは、ラシィードの説明にもあるように、〝森の人〟の意（turc. ağač は

森）だから、オグズ族の一分派で、森林地帶にあった分族に名づけられたものでもあろうか。

以上のオグズ族およびその類族のうちで、もっとも重要なトルコ系遊牧民集團は、オグズ族とキプチャク族との兩部族であって、他はこれらの分派か分族に過ぎなかったようである。そしてこれらの諸部族は、全體としては族靈信仰に基く緩やかな部族的統合を保っていたに過ぎず、むしろその部族を構成する下位集團の姓族や分族がそれぞれ獨立の政治的單位として活躍していたように見受けられる。

さて、西トルキスタンの支配的部族集團であったオグズ族とキプチャク族の東方にあるものとして、十世紀ごろのアラビヤ地理家たちは、フェルガーナから二十日ほどの旅程に等しいほどの廣い地域を占めるカルルク族と、さらにその東方から中國國境にかけて住むトクズ・オグス族すなわち當時の西ウィグル族との二つの大きい種族をあげるという（Barthold : Zwölf Vorlesungen p. 53）。

まず、カルルク（Qarluq 合剌魯、匣剌魯、柯耳魯、罕祿魯）族から始めると、この部族はむかしはアルタイ山西方の草原にあった有力部族として三姓葛邏祿族の名で知られたものであり、唐の中葉ごろ Basmil 族とともにウィグル族を擁立して東ウィグル王國の樹立に參劃したが、やがて成立したウィグル政權に追われる身となってセミレーチェ地方に奔り、一時は Sūyāb に都してその王者は Yabghu を稱したという（Barthold : Four Studies, The Qarlugs p. 80）。それと同時に、その姓族、分族なども、この地方を貫ぬく東西交易路に沿う大小都市を中心にあまたの小國家を經營したらしく、チンギス汗のころまで存續していたものに、チンギス汗に服屬した Qayaliq Arlan 王國、また盜賊團によって創められたという Almaliq の Ozar 王國、またはフェルガーナの Özkend 王國（元史133也罕的印傳にいう「祖匣答兒密立以幹思堅國哈剌魯軍三千餘歸太祖」）などがあった。しかし、これら遊牧民の商業都市支配によって建立された小國家群は、いずれもその小規模がさく、勢力も乏しかったとみえ、ビシュバリクを首都として成立した西ウィグル王國から政治的壓力がかかると、その附庸國となり、ついでこの王國からベラーサーグーン政權が分離獨立してカラハン王朝を樹てるに及んで（この部分は安部健夫『西ウィグル王國史の研究』による）、またそれに從屬し、十二世紀の初頭、このカラハン朝を亡して西遼カラキタイ帝國がこの地方に

君臨するや、またまたその支配下に立たざるを得なかった。これらの諸國家におけるカルルク人は、恐らくはオアシス都市に定着する農民や商人層に對する支配的武人層を形成したもので、すでにイスラム化されており、これら國家の成熟とともに定着民のなかに同化されて行く過程にあったようである。從って、當時のカルルク人は、西トルキスタンの曠原に住したオグズ族やキプチャク族にみられたような族靈信仰に基く古い種族的意識も、またそのような部族的組織も忘却しさっていたろうから、現存史料からそれをさぐり求めることは、もはや不可能に近いであろう。

つぎには、ウィグル王國およびカラハン王國の建設者として、中世の東トルキスタン史上もっとも重要な歴史的存在であったウィグル族について述べねばならない。もっとも、これについては、すでに安部健夫のすぐれた研究に委細が盡されているから、ここではただ立論の過程として、ふれるにとどめたい。さて、ラシィード並びにその典據となったジュワイニーの記述によると、オルホン河上に住していた古代ウィグル族は、十姓ウィグルと九姓ウィグル（いわゆるトクズ・オグズ）とに分かれていたとあり、ついでその故土から發見された碑文に書いてあったという有名なウィグル族の始祖 Bügü 可汗の傳承が述べられる。それはセレンゲ、トラ兩河の合流點に近いところに、二本の大樹があり、その間の塚に天の光が差しこんで、五人の子が生まれたが、そのうちもっとも賢明であったBügüが選ばれてウィグル族の王者となったというのであり、また天靈山（テングリクグ）に近い福山（クトタグ）から得られた〝幸福の石〟を白衣の巫覡からこの可汗に與えられた結果、彼は各地の征戰に成功して、大帝國をつくり上げたという二種の傳承からなるものである。これはまた當時の中國の諸文獻（元史122巴兒朮阿兒忒傳並びにその典據となった虞集の高昌王世勲碑、黄溍の遼陽行省左丞亦輦眞神道碑）にも、多少異った形でみえる。そこでは、塚の代りに二本の大樹がすれ合って生じた瘿から五人の子が生まれたとみえ、また〝幸福の石〟を唐人に破碎されてから、ウィグル帝國が破滅に向ったと述べられている。安部はこの Bügü 可汗を元代の西ウィグル國王 Barcüq（元史の巴兒朮）の始祖としての Adiz 家の懐信可汗に比定され、この Bügü は瘿の意味をもつトルコ語の Bu'ar に當るものだろうとされた。この傳承のなかに、そのような實在の可汗に關する歴史的追憶がかなり混入していることは

彼のいうように否定できないとは思うが、しかしこの可汗の奇蹟的誕生に關する說話は、むしろウィグル、キプチャク、ナイマン族など一連のトルコ系諸集團の共通にもった樹靈傳承とも解してよいであろう。安部が指摘したように、石刻の世勳碑にみえる兀單ト古汗は udaran-bügü qān で（同書二二九頁註）あり、その udaran はふつう女巫のことであるが、それはがんらい ütükün～etügen と同じく〝大地母神〟を意味したものでもあろうから、五人の兒を生んだという樹木は、大地母神の精がこの世に顯現したものに外ならないわけで、その大地母神が天の光をうけて姙娠し、そこに生まれたのがウィグル族の始祖だったということなのである。Bügü とは當時のナイマン族の國王の名 Bugu Inanč Bilge Bugu qān（Inanč は信用。Bilge は賢い、知識のある意）などと同じく、"Sage" ということでもあろうが、それはまた呪術的王者を意味する Begi～Böe などという言葉とも關連あるものではあるまいか。すなわち、特定の固有名詞というよりも、呪的王者に與えられたタイトルなのであろう。

このウィグル族についてもっと重要な問題は、この王國の國家組織についてである。何故なら、古代ウィグル文化の正統を繼承した、この西ウィグル王國の組織は、當時のユーラシア大陸における遊牧諸種族間においては、もっとも開化した遊牧國家の模範と仰ぎみられていたからである。安部は ulus∧ulus の議論のなかで、西ウィグル王國は王室の直轄地以外は大小の封侯があり、大封侯は多くの附庸國をもっていた、いわゆる遊牧封建的國家と規定された。しかし、中心問題は、むしろ中央における王室の政治權力構造とこの大小封侯との間における支配關係に置かれねばならないであろう。もちろんこれらについての史料は乏しく、わずかに中央官制に關しても、例えば〝國相荅剌罕〟（元史124岳璘帖穆爾傳、歐陽玄高昌偰氏家傳）とか〝阿天都督〟（または阿大都督 adui-tutuq 特別の都督の意か）とか〝設託陀〟（Shad-tutuq? 元史124塔本傳）などの官職名があったらしく、これらは東ウィグル王國の官制をそのまま繼承したものであろう。または〝吾魯愛兀赤〟（大秘書官？元史134小雲石脫忽憐傳、ulur-ayruči の ayruči とは Sprecher, Adjutant ……）あるいは〝探花愛兀赤〟（掌醫官？元史133脫力世官傳 Tamya ayruči）などの官職もみえるが、詳細は不明である。また、王權の基盤たる中央軍制については、全く不明なのだが、ケレイト、モンゴル族などの王者にみられた近衛軍團制（すなわち禿魯花質子軍制 Turqa'ud）やいわゆる探馬赤軍制の原形な

ども、案外このウィグル王國の遊牧封建的制度に由來するものではなかったかと疑われる。ナイマン、ケレイトなどの古い遊牧國家の諸制度はもとより、モンゴル帝國の諸制度なども、ある種の重要なものがこのウィグル王國に範をとったものであろうというのが、わたくしの目下の臆測なのである。

三　モンゴル高原東部の諸部族について

ここでは、ラシィードの「部族篇」の分類による第(2)グループ、すなわちモンゴル高原の東部乃至は東北部を占據していたモンゴル語族系の諸部族—第(4)グループに包括された、いわゆる〝固有のモンゴル族〟は除く—を取扱うこととする。ラシィードの第(2)グループで取扱う種族の名稱はつぎの如くである（部族の原名は便宜上モンゴル語の原名に近いもので表わすこととした）。

1. Jalair　2. Sünid　3. Tatar　4. Merkid
5. Kürle'üd　6. Töläs（D'Ohsson は Coulasches）
7. Tomad　8. Bularacin　9. Keremüčin
10. Qrasud　11. Tamraliq　12. Tarrud
13. Oirad　14. Barrud　15. Qori　16. Telengüd
17. Kestemi　18. Uryanqa　19. Qorqan
20. Saqaid

この種族名リストはラシィードの實際の敍述とは順序が違っており、11の Tamraliq も全然取り上げられていない（この名稱は〝ダムガをもっている人〟の意で、ラシィードは別な箇處では、第(4)グループ内の一部族スルドスの一分族の名としている）。また D'Ohsson によると、ブリヤート（Bouriates）族が挿入されている。これらは、ラシィードの版本による相違であろう。これらの諸種族は大體三つに區分できるようである。すなわち、1から4までの諸族は、かなり古くから獨立し對立し合ってきた有力な遊牧民集團であり、5から9までおよび12、14、15、16の諸族は、高原の北端からバイカル湖の東岸のいわゆるバルグジン・トグム（Barrujin Torum バルグジン河の隘所）にいたる地域に住む半狩獵的遊牧民集團であり、10、16、17、18の諸族は、バイカル湖の西岸からイェニセイ河の上流、ケム河近傍にいたる地域にあった森林狩獵民集團である。最後の19、20の二種族は、所屬不明で多分他の種族の分族（19の Qorqan は5の分族であったらしい。）に過ぎまいが、ラシィードもその所屬を決しかねて、便宜的にここに挿入したのであろう。

まず、遊牧民の部族集團から説明に入ると、最初のジャライル（Qaum Jalāīr）種族についてのラシィードの記事は、つぎの如くである。

この諸部族（arab. Aqwām, Qaum の複數形）はむかしは、かなり多人數の集團で、その分族（arab. Shu'ab）はそれぞれ自己のエミールや首長をいただいていた（略）。彼らの一部のものの牧地は、オノン河畔にあったが、むかしキタイの軍がこの地方のジャライル族と戰ったとき、わずかのものしか逃れることができず、その逃亡に際して、〔モンゴル族の首長〕ドトン・メネンの妻モノルンを殺してしまった。ジャライルの親族（arab. Qabīle）のものが難詰していった。お前たちは何故にこのような怪らぬ振舞をしたのかと。この理由で、そのうちのある者は殺され、殘ったものは、ドトン・メネンの孫カイド汗およびその子孫の俘虜となり奴隷となった。これが祖先から相續されてチンギス汗のときに到った。それで、この部族はチンギス汗の "Önyu Büyül" (mong. ＜Ötegü boγol 類代の隷臣）となっている（略）。彼らの〔本來の〕牧地は、〔むかしは〕カラコルム山の qīmā にあったといわれ、〔當時は〕ウィグル國主グル汗の牡駱駝にバターを食物として差出したほどの徹底した服從ぶりを示した（略）。このジャライルはつぎのような十の大きい分族からなるものである。Ja'at, Tōquraūt ＜Toqura'ud, Qūnqūsaūt, Qomsā'ut, Oyaūt, Nilqan (D'Ohsson, Bilcassane), Qorqan (D'Ohsson, Couguere), Tolanggid, Turi (D'Ohsson, Büri), Shangγut (D' Ohsson, Shingoute)

右の記事によると、このジャライル族（札剌亦兒 押剌亦兒）は、東ウイグル王國のモンゴル高原支配時代は、それに服屬して西方にあったらしいが、そののちオノン河の東（元史 119木華黎傳にも〝札剌兒世居阿難水之東〟とある）すなわち〝固有のモンゴル族〟の東方に移住していたのかもしれぬ。中國の史料には十一世紀の初頭において阻卜、扎剌、部、節度使司（遼史 46）の名が見え、同じく太平元年（聖宗朝一〇二一年）に遼に來貢したとあって、當時のモンゴル方面における遊牧諸種族の大きい連合王國であったらしい阻卜（後述する）連合に參加していたもようで、のちには遼朝に背反して敗れ逃れる際に、誤ってモンゴル族の領域を犯し、その首領の妻およびその一族を殺戮したというのである。この說話はモンゴル族の歷史にとって重大かつ著名な事件であったらしく、歷史をとくところで、とくに細かに傳えられている。この結果、モンゴル族は一時滅亡の危機に瀕したが、チンギス汗六世の祖カイド汗が姻族であった14の Barrud（このグループの一族で、バイカル湖東岸にあった）族の援助の下で、再興したのち、罪を犯したジャライル族を責め、それ以來、この種族の全體か、責任ある分族か不明だが、それらがモンゴル族の世襲の隷民となったという。にもかかわら

ず、當時大きい集團をなしていたことは、十の大きな分族的部族からなっていたということでも知られよう。そのうちでも最も大きいのが、最初のJa'at〈Caqad（元史124忙哥撒兒傳の察哈札剌兒に當ろう）すなわち〝白いジャライル分族〟であったらしい。しかもこの分族の首長Gü'ün u'a（有名なチンギス汗麾下の將軍ムカリの父）が一種のシャーマン的權能をもつ人物であったことは、祕史の一挿話からも（§206）窺い知ることができる。また、Toqura'ud族の活動や存在も祕史に傳えられているが、これらがみな別箇の集團として行動しているところからみれば、ジャライル族とは、別々に首領をもつ分族的集團の單なる種族的結合を示すものの名に過ぎなかったようであり、むしろ實際は、これらの分族が各々獨立の部族集團として政治的活動をなしていたとみてよかろう。

つぎに、ラシィードは、スニド（Qaum Sunit〈Sünid祕史の雪你惕族）とその分族のカブタルン（Qābtārūn〈Qabturqas祕史の合卜禿兒合思）族とである。この種族については、彼はその由來も住地も、また部族構成についても何ら述べておらず、ただこの部族出身者で、のちにドルキスタン方面の探馬赤軍總司令官の要職にあったチョルマグン（Čormaγun 綽馬罕）なる人物について記すだけであるが、この人物は、祕史にはとくにÖtegüdei Čormaγun というふうにみえるが（祕260）この Öteg üdei を Öteg ü boγol とよるならば（Pelliot et Hambis; Campagnes p. 86）、このスニト族は、またその分族のカブトルカス族をも含めて、前記ジャライル部族と同様に、〝固有のモンゴル族〟の類代の隷屬部族にでもなっていたのであろうかと推測される。ところが、祕史では、この二つの種族をともに、チンギス汗五世の祖の末弟にあたるČaujin Örtegei の子孫から分岐した氏族であると記るしている。いずれが正しいかは問題だが、がんらいモンゴル族の世系譜は、四世以上の傍系親においてとくに不明な點が多く、必ずしも信憑はできないので、この場合も、いずれが正しいかは決定しかねる。

つづいで、ラシィードはタタール（Qaum Tātār）族について、左のように述べる。

〔タタールという〕彼らの名稱は、有名で古い時代から全世界に知れわたっている。〔そして〕これらからは數多くの分族が分岐して出た。種族全體では七十の千の家があった。彼らの住地（ar-ab. Mau'zā）や牧地は、部族、部族ごと、分族、分族ごとに分かれていて、キタイ國境近くに定められていたが、本源的ユール

トは、ブユル・ナウル(ūByūr Nāūr)というところにあった。長い間、彼らはキタイ帝國に服從し、貢租を納める民であったが、絕えず、彼らのある部分は反抗し、暴動を起した。キタイの君主はそれを鎭壓するために、軍隊を武裝して、あらたに彼らを屈服させた。彼らはまた同じように、お互いの間でも敵對し、相爭った。〔そのため〕これらの諸部族の間では、長年の戰爭がつづき、戰鬪が行われた(中略)。當時、彼らの間には、現在モンゴル人の間にみられるようなヤサーク(turc. yasaq 法令)はなかったからである(中略)。彼らはずっと昔は、大部分の時代を通じてその地方の支配者であって、强大で、完き尊敬をうけていた。彼らの非常な勢力と尊敬さるべき狀態から、他のトルコ諸部族も、その部族の區分や名稱の相違にも拘らず、この〔タタールなる〕名稱の下に著名となり、すべてがタタールと呼ばれるようになったのである(中略)。これらの著名で、各自別箇の軍隊と君主とを有したトルコ諸部族はつぎのような六つの部族からなる。

Tātār-Tōdōqūliūt, Tātār-Alči, Tātār-Terāt, Tātār čayān, Tātār Qūin〈Küin, Tātār Bārqūi〈Alqui〜Arqui。これらのうちで Tōdōqūliūt がもっとも尊敬されている(中略)。これらの諸部族では、〔前述の如く〕お互いに多くの戰鬪や小競合があり、殺人、掠奪、强奪が行われていたが、彼らとモンゴル族との間に不和と戰爭が起るようになってから、そのような〔新しい〕情況の下で一致團結するようになったのである。

當時のタタール(塔旦、塔塔兒、韃靼)部族は、當時は興安嶺麓のブユル・ノールからウルシュン河流域にかけて住する六大部族からなる部族集團であったが、この部族集團の名稱は、突厥碑文には三十姓タタールとあって、相當大きい種族であったらしく、唐代でこの突厥王國を取圍むものとして、キルギス、クリカン、タタール、契丹、奚などがあったというから、契丹、奚を除くモンゴル高原の遊牧系諸集團は、當時ことごとくこの三十姓タタールという包括的名稱の下に呼ばれたのでもあり、彼ら自身も便宜上そう自稱していたのかもしれぬ。のちに契丹が遼朝を興すに及んで、これらの諸部族はその邊境支配體制の下におかれ、從ってタタール族を中心とする統一的政治勢力は排除され、個々の集團に分裂させられたことであろうが、その際恐らく舊來の固有の名稱を復活した部族も多かったに違いない。そのなかにあって、依然としてタタールを稱したものは、この興安嶺麓にあった部族と陰山山麓にあった部族(これは白韃靼と呼ばれた。遼史に〝九姓達旦〟とあるは、これをさすか)との二つであったようである。ところで、ラシィードはこのタタール種族は六つの大部族からなるというが、その名稱は祕史のあげる六つのそれと多少相違している。そのうち、もっとも勢力があったとラシィードがいうところの Tutuqūliūd(中國語の〝都督〟のモンゴル語的複

數形。元史の脫脫里臺)は、同じくラシィードがケレイト部族の條に述べるところのブユル・ノール近傍のタタール部族の首長Nōr Būirūq qān所屬の部族と同じもので、それがまた祕史のBiru'ud族すなわち遼・金史の鼻古德族に當るものであることは疑えないであろう。また、ラシィードのTerāt は祕史にはみえぬが、遼・金史の烏古・敵烈、または八部適烈とあるものと同一であり、烏古(烏骨兒于厥里)とあるのは、祕史のAyiriud〈Agiriudに當るものでもあろうか(これをオンギラドにあてる向きもあるが、當時オンギラドは王紀剌などと記るされて、烏古里と一緒に述べられているところからみれば、そうはとれまい)。その他、Alči, Ca'an のタタール分族は兩者合致しているし、祕史のAlquiはラシィードのBarqui〈Balquiに當ろう。ただ、祕史のDuta'ud(モンゴル語で"不足"の意。)族と、ラシィードのKüinとが不明だが、これが合致するものか、あるいは各々別箇に異なるものかは、決定し難い。これらのタタール諸部族のうち、Tutuquli'ud族がとくに強力だというものの遼・金史によれば、烏古、敵烈乃至鼻古德族は、それぞれ別箇に單獨の勢力を形成して互いに拮抗し抗爭してきたようである。遼・金朝の彼らに對する羈縻政策は、西北招討使司の監視の下に、これら有力の首長を節度使などの名譽職に任じ、本領を安堵させつつ、ひたすら慰撫して、邊境の防備を負擔させようと努力したらしい。しかも、それに從わぬ彼らは、亂暴で好戰的種族だと傳えられており、それだけに種族内部における指導權をめぐっての抗爭もはげしかったようであるが、しかもモンゴル種族と對抗せねばならない段階になったときは、一致團結して、これに當ったとラシィードは記している。なお、彼らはチャガン・タタールとかアルチ・タタールというふうに、つねに部族名と種族名とをかさねて用いている。これらの事實からみると、彼ら

タタール族の分族名

祕史	漢字名	ラシィード	漢字名
Ayiriud	烏古里	Tutuquliut	
Biru'ud	鼻古德	Anči	按赤
Ca'an		Caγan	
Alci	按赤	Küyin	
Duta'ud		Tereit	敵烈
Alqui		Barqui	

は多くの分族に分かれ、互いに抗爭はつづけていても、當時なおタタール種族としての種族的統合意識は喪失していなかったようにみえる。

つぎには、メルキト（Qaum Merghit）族があげられる。彼らは同じく Uduit 部族ともいう（中略）。このウドイド・メルキト諸部族は四つの分族を有している。Ūhaz, Mudan〈Mödän, Tudaqlin, Jiun この部族は多數の好戰的な軍隊をもっていて、チンギス汗やオン汗としばしば戰った（中略）。チンギス汗の時代のウドイド・メルキトの君主はトクタ・ベキ（Toqtā Begi）であった（中略）。またメルキト部族出の他の有名なエミールはタイル・ウスン（祕史のウハズ・メルキトの首長 Dayir usun に當る）で、同じくメルキトの首領であった。

このメルキト（滅里乞、吉、篾兒吉、麥里）族は、祕史によれば、當時はセレンゲ河の中流域附近にいたようで、從って、恐らくは多少トルコ語化されたモンゴル語を用いていた種族ではないかと臆測される。古く遼代から、密兒紀、梅里急などという文字で現われて來ており、遼末の太安壽隆年間の阻卜連合王國の大叛亂に參加した有力部族の一つであったが、阻卜の中心勢力であったケレイト族の王者磨古斯汗の敗北とともに、遼に屈服して再び入朝した（遼史62の壽隆三年二月丙午の條をみよ）。チンギス汗の當時〝四つの分族〟に分かれていたこの種族を統轄したのは、有名な英雄として知られたトクタ・ベキ（祕史のトクトア・ベ（エ Toqto'a Böe）だとあるが、祕史ではつねに〝三つのメルキト〟と稱してその分族の名をウドイドとウハスとカアト（Qa'at）の三つをあげている。このうち、最後のものについて、ペリオ、アムビス教授は、祕史の異本によって異同があり、これを元史 117耶都刮傳にみえる〝察渾滅兒乞〟（Caqun Merkit）の Caqun の誤りではないかと推定された（ibid, Campagnes p. 228）。もしそうだとすると、多分最初はメルキト種族は、祕史のいう通りウドイド（兀都亦）ウハズ（兀花思）とこのチャカアン（察渾）の三つの部族からなっていたのでもあろうが、ウハズとチャカアンとがそのうちの部族戰爭における敗戰の打擊で（祕史はチャカアンすなわちカアアト族の敗北とその族長の死を述べる）勢力を失い、もっとも有力であったトクトア・ベキのウドイド族の下に吸收され、その分族たる Mödän〈Mäguden（麥古丹）Jiun（只溫）などと一緒にウドイド種族のなかに編成替えされて、四つという數になったのであろうか。つまり、このころは、種族全體の政治的消長に伴って、その内部の部族集團の編制に絕えざる變化が起っていたことを想像してもよいのではないかと思うのである。

遊牧諸部族のつぎに、バイカル湖以東からセレンゲ河地方にいたるの地域に住む諸部族集團に移ると、ここで重要な、かつ大きい集團であったと思われるものは、バルグト Barʼud 族とキュリュリュト族がある。まず、バルグド（八剌忽）族については、

これら多くの諸部族〔種族的には〕お互いに近く、彼らの牧地はセレンゲ河の北方で、モンゴル人が住む極限の Baryujin Toʼyum（バルグト河の隘所）の地にあったものなので、Baryud といわれた。

とあって、このバルグト族は、Qori, Töläs, Buriat の三部族乃至分族から構成されていたらしいから、あるいは唐代の三姓骨利幹（Qoriqan）などとも關係あるものであろうか。つぎのキュリュリュト（Kürleüd〉Külüd）族については、ラシィードはこう述べる。

この部族は Qānqūrāt（Onggirad弘吉剌廣吉剌）や Eljigin や Baryūd の諸部族などと近しく、お互いに一つになっていた。そしてこれらの間では、タムガが同一であった。彼ら同志は親族としての要件をみたし、お互いの間では、聟・嫁〔交換の慣習〕を守っている。この諸族の大半は、いちどもチンギス汗と交戰したことも敵對したこともなかったので、彼はこれらの諸族を分割したり、隷民にするようなことはせずに、もとの領土に安堵させたのである。チンギス汗の時代においては、彼らは Anda-qūdā（アンダとは盟友クダとは姻族關係をさす。すなわち姻族的結合による政治的同盟關係を意味する）の道を守った（中略）。

その各親族には、別箇の名稱があり、Jūt-qurqan（これは、所屬不明の19の Qorqan にあたるものであろう）と Ōimāqūt（外秣、外麻などとかかる Oima は革嚢の意）の二つに分かれていた。

このキュリュリュト（曲呂律苦里魯）族が前記のバルグト族やその他とお互いに一つになっていたとするならば、やはりその住地はバルグジン・トグム近傍にあったのでもあろうが、それらの諸族はまた〝タムガ〟すなわち牧地や家畜群を共有する種族でもあったというのである。ところでこれらの諸族うち、オンギラッド、エルジギン族は、第(4)グループの〝固有のモンゴル族〟との姻族であり、またバルグト族もそうであったし、キュリュリュト族もチンギス汗時代は〝アンダ・クダ〟の關係に立っていたというから、これらの諸族は同時にみなそろって、チンギス汗のモンゴル部族すなわち第(4)の〝固有のモンゴル族〟の姻族でもあったことが理解される。以上の諸事實から推して、これらの諸族はむしろもともとは同一種族を形成していたもので、のちに姓族ごとに分岐したものではないかと疑われよう。ただ、父系的外婚制のモンゴル社會では、このような骨（父系的血統）を

同一にする種族の間では通婚できぬはずだから、ラシィードの文中にある〝親族の要件をみたし、聟嫁の交換を行った〟という點については、むしろ否定詞が抜けたものと理解さるべきであろうか（もっとも、ラシィードはモンゴル社會の父系的外婚制に關して理解を缺いていたようで、彼の敍述のなかには、しばしば混亂がみられることを注意しておきたい）。

つぎに、バイカル湖以西の森林諸種族としては、ケム河上流の八河地方にいた大部族集團の Oirad（祕史の斡亦喇惕）やその北方にあった〝森のウリヤンカイ族〟（斡娘改、兀喰哈）を始め、Urasūd（祕史の兀兒速惕）Telengud（祕史の田列克脫）Kestemi（客思的音）などの諸族、またここにはみえぬが、祕史や元史地理志にみえる Qabqanas（敢哈納思、元史はこれを憾哈思〝布囊〟の意という）Qanqas（康合思）など、その他あまたの部族が、この方面の廣い森林地帶に散在していたらしいが、Oirad の條でラシィードがいう如く、これらは基本的にはモンゴル語族であったかもしれないが、バイカル湖東側のモンゴル語とは大分異っているとわざわざ注意しているから、むしろトルコ的要素の濃いものであったろうと察せられる。

四　モンゴル高原西部の諸部族について

ラシィードが、第(3)のグループに區分したモンゴル高原の西方に住む諸部族は、すでに指摘したように、東方に住む前述の第(2)グループの諸部族に比して、モンゴル、トルコ語、トルコ語、タングト語、その他諸種の言語をもつ集團であり、かつ文化的にも第(2)のグループより一般的に高く、政治的には遊牧國家を組織していたものが多かったことが、注意される。ラシィードのリストに含まれる諸族は、つぎの通りである。

Kereit, Naiman, Öngüd, Tanγud, Bekrin, Qirghiz

なお、これに關連するものとして、第(1)グループで説明しておいた西アジアのトルコ諸部族のウィグルとカルルク、キプチャクの三集團についての敍述が、多少つけ加えられている。右のうち、最初の四つの種族が草原に住む遊牧民系のものであり、あとの二つは森林種族である。

まず、遊牧系のケレイト族（Qaum Kereit）から始めよう。ラシィードはこれについて、當時のケレイト族の君主 Ong-qan の所有する數多くの私の夏營地、冬營地並びにその麾下の左・右兩翼の軍隊の牧地をあげたのち、つぎの如くいう。

彼らには〔古くから〕自己の部族出の尊敬すべき君主があった。當時この地方では、彼らは他の部族より強い力をもっていたのである。彼らにはイエスのお思召しがあって（中略）、その信仰に入った。彼らは〔本來〕モンゴル族の血統で、その住地はオノン、ケルレンの河沿いのモンゴルの地にあった。その周縁はキタイの國境に近い。いくたびも〔ケレイト族は〕多くの部族と敵對し、とくにナイマン族と對立することが多かった。オン汗のとき、ジュルキン（Jürkin〈タグロフには誤って xarakin とある）族の首長は Güyük bahadur で、Qūrāni（Kürigen のことか）の一萬人の指揮者であり、彼のユールトは Jidun Qaraun（興安嶺をさす）というところにあった。チンギス汗がオン汗を破ってその部族が敗走したとき、この Güyük の四人の子はチンギス汗に仕えるため、やってきた（中略）。このケレイト諸部族は多くの部族と親族とをもっていたが、それらはすべてはオン汗の部下であった。それはつぎのようである。

といって、君主オン汗の出身のケレイト（Kereit 怯烈 客烈亦惕）を始め、それに從うジュルキン（Jürkin〜Yürkin 月兒斤）Qōnqāit（〈Dongγaid 秘史の斡欒 董合亦惕）Saqait（〈Saqāt）Tōmāūt（〈Tübegen 土別燕 拓跋）Aldat（D'Ohsson には Éliate とある）などの諸族をあげ、つづいてこのケレイト王國の歴史を詳らかに述べている。

オン汗の祖父にマルクス（Marqūz, Marco に當る）という名〔の君主〕があり、Būrūq qān とも呼ばれた。當時はタタール族が非常に數も多く強力で、しかもキタイや女眞の君主に服從の態度を示していた。タタールの貴族の長は Nōr Būrūq qān といって、その牧地は Buīr nāūr にあったが、好機を狙って彼はケレイト國の君主マルクス・ブイルク汗を捕え、女眞に送ったが、女眞國ではこの王者を木馬に釘打ちして殺した。しばらく後になってから（以下大意）、その妻が馬乳酒を容れる革嚢に完全武裝した兵士百人をかくまい、荷車につんで、タタール族の宴會の席に赴き、その宴のたけなわの折、その革嚢から飛び出した勇士たちとともに、タタールの君主や首長たちに襲いかかって、殺し、血の復讐を果したことで有名となった。

このマルクス汗には二人の息子があり、一人はクルジャクス・ブイルク（Qūrjāqūs〈Cyriacus クリスチャン名）汗といい、他をグル（Gūr qān）といった。〔古い記錄では〕クルジャクス汗はもとオルタ・バラガスン（Orta Balaγasum ウイグル王國の都城地。當時窩魯朶城と呼ばれていた）にユールトをもっていたとある。彼は〔自分の弟の〕グル汗と〔長子の〕のオン汗とにユールトを同一の地域（この地名は文字が不明でわからぬ）に與え、他の子の Tai-Timur-Taiši と Yula-Maγus とにはそれぞれ Qaraγac Bururuc（?）の地を與えたが、このときクルジャクス汗はいった。もし、彼らが一緒ならば、平和はあるまい。わしの死後、彼らは〔相爭って〕夜から朝まで朝から夜まで、このケレイトのウルスを保つことはできないであろうと。このような理由で、彼は子どもたちをお互いに引きはなしたのである。

ついで、ラシィードは、オン汗が父の死後、計略をもって兄弟を謀殺して土地を併せたので、叔父のグル汗（本名は Eljigidei）

がその罪を責めてオン汗をケレイト國から追い拂った。そこで、彼は東方のモンゴル族の一首長たるイェスゲイ（チンギス汗の父）に援助を求め、その力でついに叔父のグル汗を廢して、ケレイトの王位に卽いた事情を述べる。さらに、このケレイト王國の知られざる歷史について、ラシィードはタタール部族の條にもまた、この部族との抗爭にふれて相當に重要な記事をのせている。それをかいつまんでいうと、こうである。

當時のケレイト國の君主 Sariγ-qān（トルコ語で、黃色の君主の意）は、アルチ・タタール族の首長の Qorildai-Tatir と Kümüs～Sinjang らと戰ったが、彼は Kümüs を捕え殺して、〝アルチ・タタール族には七十のウルフがあるが、この Kümüs を除いて男はいない。今こそ彼らを追い拂う時だ〟といった。そして、オルホン河上に陣して Qorildai-Tatir の本軍と戰ったが、むなしく敗れ去り、逃れて Bitāktāi-Ōtōkū-Qōrči Būirūq（これは多分ケレイト族の西南方にあったベテキ・ナイマン＝別的因乃蠻族の君主をさしたものであろう）の庇護をうけるにいたった。彼は前にクルジャクス・ブイルク汗に自分の娘を與えたが、それは Qādir qān（前述のベテキン・ナイマン族の當時の一君主の別名か、またはその子の名であろう）の妹にあたる。そののち Qādir qān はサリグ汗とともにタタール族を襲い、彼のためにケレイト・ウルスを解放してやった。このとき、ちょうどオン汗は自分の母 Ilmā xatun とともにタタール族のもとに俘虜となっていたのである。なおサリグ汗の娘の息子には、Yulā-Moγus と Tāi-Timur-Taiši の外に四人いたというが、今日その名は傳えられていない。

以上がその大要であるが、ここには當時のモンゴル高原の遊牧諸族の政治的動靜を傳える貴重な史料がある。まず、ケレイト族はがんらいモンゴル系で、トルコ訛りのモンゴル語族でもあったろうが、その本據はむかしはオノン河畔であったが、當時は祕史によれば西南方のトラ河畔の黑林にあり、その西北方にいたる沼澤、草原、山岳の豐かな地域を大きく支配していたようである。しかも西方文化の影響の下に、十一世紀初頭ごろからネストル派に改宗していたことは、王者マルクス、クルジャクスたちの名からも容易に察せられよう。しかも、このマルクスなる人物は、チンギス汗の父イェスゲイとほぼ同年輩であったらしいオン汗の祖父にあたるというから、その生存年代は晩くとも、十一世紀中葉から末葉にかけてのことであろう。とすれば、彼は遼の道宗朝の大安壽隆年間（正確には大安八年五月1094年から壽隆六年二月1100までの八年間）に、遼朝に背叛して大亂を捲き起した北阻卜國の王者磨古斯その人に比定することができようか。この阻卜（朮不姑、直不姑、または蘇木、速木などとも寫される。匈奴の貴種の須卜も同じ發音であろう Jubuq か Sūbük か）な

る當時のモンゴル高原における遊牧國家の來歴は、いまだに解明されていないが、遼初よりこの阻卜國は東の高麗國とともに遼國にとっての惱みの種であったらしく、それは梅里急、九姓達旦（これは陰山のそれを指したものであろう）、乃滿その他有力な諸族をその下に糾合していた一大連合國家であったようである（王國維はこの阻卜を元代史家の揑造したものと考えたが、その確實な根據は何もないようである「韃靼考」）。そして、當時その連合國家の指導的地位に立ったものが、ケレイト族であったらしい。ケレイト族長磨古斯汗は遼に依存しつづける首長、屯禿古斯汗を廢して、自らその首領の地位に立ったが（大安五年五月己丑の條に〝以阻卜磨古斯爲諸部族長〟とある）、しかし、遼朝に抗したため、遼軍とタタール糺軍との軍をうけて敗れ捕えられて殺された（遼史39蕭國王および94耶律阿魯掃古傳などを參看せよ）。そのため阻卜連合は崩れ、ケレイト王國も混亂に陷ったが、その混亂を引受けて立ったのが、さきにみえていたサリグ汗であったと想像される。彼の出身は不明だが、多分 Saqiat 族出身ではなかったろうか（Juwaini によると、むかしはケレイトとこのサキアト族とがこの王國の強力な部族であったと傳える、Boyle. p. 35. しかも、これらは分族同志というよりも、姻族同志であったらしい）。いずれにしても、マルクス汗の子クルジャクス汗の妻の父で（ペリオはサリグ汗をクルジャクス汗と同一人物とみなすが、ラシィードの記述による限りそれは誤解というべきだろう。Pelliot, ibid. p. 241—247）多分若年のクルジャクス汗を助けて、オルホン河畔まで流入し來った遼、タタール連合軍と戰ったが、利なく、當時その連合に加盟していたらしい〝固有のモンゴル族〟にも見放されたが、クルジャクス汗が代って惡戰苦鬪した結果、その晩年になってようやく、ケレイト王國は立ち直って、高原の中央部に安居することができるようになったものと推定される。しかもその混亂の間には、十三歳のオン汗は母とともに（この母はサリグ汗の娘とは異なる人物）、タタール族の阿澤罕（Azaj?ペリオはこれをアルチ・タタール汗の誤りとみる）の下に俘虜生活を營んだと祕史は傳えるのである（152）。

オン汗の當時、この王國はケレイト族を首長と仰ぐ六つの部族集團からなっていたが、これが單に同じ血族から分かれた分族であるのか、姻族關係にあるものも入っていたのか、またジュルキン族のように、むしろモンゴル族出身と覺しきもの（このジュルキンなる族名は、チンギス汗族の有力なオボフの名にも見える。それとどのような具體的關係にあったものか不明だが、ケレイト族には、ラシィードの記述によると、大部古くからモンゴル族が加擔していたらしいから無下にその關係を否定するわけには行くまい）もあったようで、その王國の性格にかんがみても、その部族構成は大部複雜であったらしい。しかもそれらがケレイト族の支配の下に左・右兩翼に統制

されていたらしく、ケレイトの君主からそれぞれ牧地を割當てられていたといい、祕史(166 170)には、王者オン汗は可汗として自己の近衛軍なる千の侍衛(Turqa'ud 禿魯花=質子軍)を率いていたと傳えるが、近衛軍は、服屬する部族の首長、エミールたちの子弟を選拔して編成したものらしいから、かような質子の制度を通じて、ケレイト王國内の諸部族集團を從えていたものと考えてよかろう、

ケレイト王國につぐ西モンゴルの大國は、その西隣のナイマン(Qaum Nāimān)族であった。これについては、ラシィードはほぼ二つの異なる傳聞資料で書き綴っているようにみえるが、その大要はつぎのようである。

ナイマン族の以前の君主には、Narqūš Tāyān と Inanč bilge Bügü qān(亦難赤罕)という二人の兄弟があったが、彼らが北方のキルギス族を破った折、弟の Inanč 汗は長兄の Narqūš 汗のもとに姿を現わさず、戰利品も差出さなかったので、兩者は分裂し、對立した。Inanč 汗にも二人の息子 Būirūq qān(不亦魯克罕)と Tāyān qān(塔陽罕・泰陽可汗)とがあったが、彼らも父の若い愛妾 Gürbes ü xatun(これはオルドスの傳說によると大蛇の化身だという)を爭って父の兄弟と同じように仲が惡く、ついに分裂し、對立するようになった。弟の Tāyān(本名は Tai-Buqa。Tayan とは中國語大王の意。以前からこの王者は Tayan と稱している。西阻卜大王國の"大王"からとったものでもあろうか)汗は、北方のイルティシュ河流域からザイサン・ノールあたりまでの平地に住し、兄の Buirūq qān はアルタイ山麓から西北モンゴル山岳地帶にあって、この對立を深めたのである。

このナイマン(乃蠻)族がウィグル族の後身か、または北方のキルギス族の後裔か一時問題となったが(植村清二「乃蠻小考」和田喜壽記念論叢)、キルギス族とは絕えず對立抗爭していたようであり、またウィグル族と同じ樹靈傳承をもっていたようだから(後述のラシィードの言をみよ)、むしろウィグル族の分派とみておきたい。またラシィードはいくつかの分族にわかれていたというが、その分族名がここには見えない。ただ、祕史に Buirūq 汗の支配する部族名として、Güčigür (mong. Küčügür 野鼠の意)とあり、またペリオは Tayan 汗の部族を Aqsa'ud (turc. aqsaq 意味は跛足)族としているが、その他の分族の名は知られていない。このナイマン王國は、以上の二つのウルスと二つ以上の部族集團に分裂對立していて、チンギス汗の當時は、モンゴル國家から襲擊をうけても、相互に援助し合わなかった。この王國の古い歷史は全く不明だが、遼代においてはやはり阻卜連合體の有力な一翼をなしていたらしく、その連合體の崩壞後も依然としてこの方面において勢力を張っていたものらしい。ラシィー

ドはとくにこの王國の君主の特殊性格とその稱號に注意を拂って、つぎの如くいう。

Inanč Bilge Bügü Qān の意味は、Inanč (turc. inanč ンチ〝イナ〝とは信賴、または信賴できる〝という意味。Pelliot: 250) とは信ずる〝、Bügü (bilge bügü とは Brockelmann の Kāšgharī に從えば "zauberkundig" すなはち魔法を解するという意。Pelliot 同上) とは偉大なという意味である。むかし、この Bügü 汗はウィグル、ナイマンその他から一本の樹木から誕生したと信ぜられている偉大な君主である。また、ナイマンの君主には、Qušlūq-xan とか Būrūq-xān などという名のものが多いが、Qušluq とは〝强大な〝という意味で (turc. qušluγ=vogelreich, Gabain, Altürkische Grammatik p. 331)王者が特別の能力をもつことに由來し、また Buiruq は命令するものという意味 (turc. buyruq～buyuruq Befehlshaber, Minister, Gabain, ibid. p. 306) である。なぜなら、ナイマンの王者はとくに妖精や人間を支配し、妖精に乳を搾らせ、それから酢ばい牛乳や馬乳酒をつくらせる能力をもっていたが、臣下の諫言によってそののち一切止めてしまった。

ナイマン國王がこのような呪術的性格をもつ君主であったことは、長春眞人の西遊記の記事からも立證されることで、そこでは死んだナイマン國王が山の精となって旅人を惱ます存在となっていて、神饌(すなわち國王やシャーマンが作った馬乳酒の如きものも含まれるのであろう)を捧げてその靈をなぐさめたという。にも拘らず、同時にこの國王たちや貴族たちは Juwainī のいうところによると (Boyle p. 64) 大方ネストル派の信奉者であったという。しかも、その國家組織も高度な行政組織をもっていたらしく、有名な塔塔統阿傳には(元史124)、ウィグル人の彼が Tayan 汗の王傅となって金印、錢穀(財政)を掌りウィグル文字を使用していたとあり、また龔加歹傳(同書131)にもその祖の合折兒 (Qajir) がナイマン王の帳前軍を管轄し、國政を統べていたとあるから、ケレイト王と同じような侍衛質子軍をもっていたことが窺い知れるのである。なお、この王國の南部には、これらから獨立したウルスを形成したものとして、Betekin Naiman(別的因あるいは別帖乞など)という部族があり、その君主は Qajir Būirūq qān と稱していた。かつてはケレイト王國を助けてタタール軍と戰ったものであり、ラシィードによれば、むかしはケレイト、ナイマンなどよりも强力で、一時高原地帶を支配したこともあったといわれる。

つぎに、オングド (Qaum Ōnγūt ＜Öngüd) 族が述べらるべきである。それに關するラシィードの記述は、大要つぎの如くである。

オングトの人びとは他の部族とは異っているが、ただモンゴル族には似ている。當時キタイの君主アルタン汗は自國をモンゴル高原の諸部族集團から防衛するため、モンゴル語で Ōngū、トルコ語で Burqur という城塞を築いたが、その防備の義務をこの部族の手に委ねた。當時このオングト族のエミールは Alaqūš Tegit-Quri で、彼はかねてからチンギス汗に好意をいだき、ナイマンのタヤン汗とチンギス汗が對立したとき、ナイマンの勸誘を拒否してチンギス汗側に味方し、またチンギス汗がキタイを攻めたときは、長城の通路を教えた。このため、チンギス汗は彼に娘を與えようとしたが、彼は年老いているので辭退して、金國に人質となっていた兄の子（元史阿剌思失傳の鎭國）に與えるようにと依頼した。その間、彼は他のエミールたちに殺されたのである。

ラシィードの記述は、チンギス汗に味方したこの種族の一首長 Alaqūš（元史の阿剌兀思・剔吉忽里）を中心にして述べられたもので、オングド（汪古、旺古、雍古）族の種族的系統については何も述べず、比較的モンゴルに類似しているというだけである。ただ、その名稱の由來について、長城乃至陰山のモンゴル名が、その名となったように說いている（北匈奴に溫禺鞬王なる人物があるがこの名も Ōngūd であるに違いない）。察するに、この種族は遼代の陰山室韋乃至は九姓達旦などと稱されたものの後身であり、他の種族よりも早く中國化されて文化水準が高かったため、當時は〝白韃靼〟などともいわれた。沙陀の後裔などと中國文獻にはあるが、種族的にはモンゴル系の被支配層とトルコ語系の支配層とからなっていたのではなかろうか。族長 Alaqūš の名はトルコ語で〝班色の鳥〟と解かれ、Tegit Quri という稱號はトルコ語の〝的斤〟とモンゴル語の支配者（あつめるもの）との混交語であり、その兄の名と傳えられる Ai-Buqa も同じくトルコ語で、〝月の牡牛〟の意がある。部族構成については、祕史に五千戶、ラシィードに四千戶とあるだけで、分族の名も不明だが、想像するに高唐王家となった Alaqūš 族の外に、有名なネストル教王一族の馬氏（元史134月合乃傳、馬祖常の禮部尙書馬公神道碑など）、趙氏（元史121按竺邇傳）、汪氏（元史155汪世顯傳）の名族が傳わっているから、これらもむかしはそれぞれ高唐王家と相並ぶ族長の家系であったかもしれぬ。そして、この王家の首都豐州天德軍（靜州天山縣オロン・スム）はこの方面におけるネストル派の一大根據地であるとともに、西アジアとモンゴル高原と中國とを結ぶ東アジアにおける交易の一大據點として、遼金以來榮え來ったものであり、ここには各地からの商賈が入り來って、六ヶ國語が流傳していたという（元遺山文集23恒州刺史馬君神道碑）。例えば、祕史の傳えるイスラム商人阿三（Hasan）はこの王國からシベリア境の森林

地帶の種族の間から毛皮を求むべく赴いたのであったし、その外にも蒙韃備錄の回鶻商人の田氏（チンギス汗、オゴタイ汗のとき宰相となった田鎭海の一族をさすか）Juzjāni の傳える Ja'far xōjā (Raverty, Tabakati Nāṣiri, p. 954) など、いずれもここを根據とする、いわゆるオルタク（ortaq）商人であったに違いない。このような複雜な經濟的文化的かつ政治的環境の下にあってオングト種族は恐らくむかしから强力な政治的勢力を結成することはできなかったようで、當時はただ金朝の羈縻下において、多くの商業都市を中心に形成された小さい若干部族國家のゆるやかな連合體が、このオングトの名の下に形成されていたとみるべきであろう（この點、東トルキスタンにおいて、オアシス商業都市を經營したカルルク族の國家に似ていよう）。チンギス汗以降はそのような緩やかな諸部族連合體が、モンゴル帝室の姻族としての高唐王の權威を背景に、Alaqūš 一族のオングト五千戸の一元的支配が完成されて行ったものとわたくしは考えたい。

つぎに、ラシィードはタングト（唐兀 唐古）族をあげるが、これはかなり遊牧民的性格は殘していたものの、ラシィードのいうように大抵は都市、村落に定着する民族であったから、ここでの遊牧諸種族の列からは除外しておく。

以上、第(3)グループには遊牧諸部族の外に、なお、北方の森林民族系のものとして、キルギス（qirghiz 吉利吉思）とベクリン（Bekrin）の二族をラシィードはあげている。キルギスは古くから中國史書に現われてくる著名な種族で、イェニセイ上流の廣大な地域を占め、人口も相當にしかもこの河の流域で農耕、牧畜、狩獵を營み、金屬をも細工する技術をもっていたというきわめて特殊な森林民族であって、唐末には南の平原地帶に出てウィグル王國を崩壞させ、一時ながらモンゴル高原を支配したこともあったが、それ以降はモンゴル高原における政治勢力の抗爭に參加しなかったもようである。チンギス汗のころは、祕史では Tümen Qirghiz（一萬のキルギスの意、元史地理志には九千戸とある）と呼ばれていて、Inal と稱する多くの首長からなる一大部族連合國家を形成しており、さらに北方の森林部族、例えばアンガラ河周邊にいたらしい昂可剌族などを隷屬させていたらしい。また、ベクリン族については、これは Mekrin ともいい、ウィグリスタンの山岳地帶に住す健脚種族だとラシィードはいう。これはオルホン碑文の Bökli や遼代の鷺古にあたるトルコ系種族の一つであろうが、當時はみるべき政治的勢力は

全然もち合わせてはいなかったので、それ以上論ずる必要もあるまい。

おわりに

以上は、チンギス汗のモンゴル部族集團によるモンゴル高原支配の政治體制が出現する以前の、ユーラシア草原地帶の遊牧民の狀況とその政治的動向とを明らかにしたいという意圖の下に、ラシィードの「部族篇」を取扱って來たものであった。そして、第(4)グループの〝固有のモンゴル族〟を除くの外、他の三つのグループに含まれる諸部族の個々の歷史とその部族構成とを簡單ながらも逐一調べてきた。それをここにふりかえって要約してみると、第(1)のグループでは、ユーラシア草原地帶の西部、カスピ海北岸方面にあったキプチャク、オグズなどの部族連盟的社會は、もっとも古い民族の傳承と同時にもっとも古い社會體制を維持するものであったらしいが、東トルキスタンの草原にあったカルルク族やその南方にあった西ウィグル族などは、モンゴル高原西部からこの方面にかけて繁榮した過去のトルコ・ウィグル文化の傳統をうけつぎ、自己の地域内の多くのオアシス都市を支配して、そこに小王國の連合體乃至は附庸國をもつ大小の封侯を支配する遊牧封建國家をきずき上げていた。ところで、モンゴル高原方面に眼を移すと、ここでは、第(2)グループのモンゴル語族系の諸部族は、第(1)グループのキプチャク、オグズ族のような原始的部族制社會の段階からはすでに出ていたが、まだ遊牧國家を形成する段階には到達しておらず、多分に種族的社會の殘滓を殘していわば部族連盟的社會をなしていた。しかもそれらは、姓族、分族ごとに分裂、抗爭して、なかには同じ姓族が他の姓族に征服支配される場合も現われ來ったようである。それに對して、第(3)グループのものは、その地域に殘存していたトルコ・ウィグル的文化の傳統をうけつぐとともに、絕えずその文化の正統的後繼者たる西ウィグル王國や乃至は中國からもその範をとってそれぞれ獨自の遊牧國家を形成していた。これらの遊牧國家群の成立の途上において、遼代の阻卜にみられたような、ケレイト王國を中核とするモンゴル高原の諸遊牧部族國家の一大連合も出現したようだが、結局は永續せずして瓦壞し、そののちはむしろ有力な部族國家が他の部族集團の姓族や分族を吸

收し、併呑しつつ、發展をおしすすめて行ったようである。一方、オアシス都市の定着民を武力的に支配することによって成立をみた遊牧封建國家群が、カルルク族や西ウイグル族によってすでに東トルキスタンの地に實現されていた。當時のユーラシア大陸にみられたこの二つの遊牧國家のタイプが融合し合って、やがてユーラシアの遊牧國家は、新しいタイプのモンゴル帝國の成立へと結實してくるのである。この融合を實現させたものが、ラシィードによって第(4)グループとされた〝固有のモンゴル族〟なのであった。從ってこの部族集團こそ、實はもっとも詳細に分析されねばならない存在なのである。それに關しては、また近々發表したく思っている。

東洋史研究叢刊

第十三　金朝史研究　外山軍治著

本文　六七五頁　年表　一三頁
索引　三〇頁　定價　二八〇〇圓

第十二　中國征服王朝の研究　上　田村實造著

本文　四四四頁　定價　二二〇〇圓

第四之四　アジア史研究第四　宮崎市定著

本文　四九八頁　索引　三二頁
定價　二五〇〇圓

右書御希望の方は本會までお申込み下さい

京都市左京區吉田本町　京大文學部内
東洋史研究會
振替　京都三七二八番